

# アキオとネーネと石

古賀松香



## アキオとネーネ

“アキオとネーネは、いつも一緒だったのだ”

そのことに私が気づいたのは、アキオの姉（ネーネ）であるカオリが、小学校に通い始めたときでした。当時、アキオは一歳十か月でした。

アキオが十か月になり、私が仕事を再開してからというもの、二人は同じ保育園で生活してきました。ネーネとアキオはもちろん違うクラスですが、ネーネが園庭からアキオのクラスをのぞき込んで声をかけたり、園庭で出会っては手をつないで遊んだり、ネーネはいつも近くにいる存在だったのでしよう。私は子連れ単親赴任をしてい

ますからどちらかを父親に託して出かけたことはほとんどなく、いつも二人は一緒だったのです。

### ●● 突然の別れ

ネーネが小学校へ初登校する朝。通い慣れるまでは、と早起きして、アキオも一緒にベビーカーで小学校まで見送りに行きました。といつても、見送りに行くつもりなのは私だけで、アキオにとっては、なんだか不思議なお散歩だったのではないかと思えます。見慣れない服を着て、大きなかばんを背負ったネーネの後姿を追って、アキオはものも言わず、ベビーカーに乗っていました。いよいよ小学校に着き、ネーネが「じゃあね、バイバイ」と振り向いて私たち二人に手を振りました。アキオはジッと見つめていました。私は「ネーネ、学校行くんだよ、バイバイって」と言っ

見つめたまま動きませんでした。

ネーネの姿が見えなくなつて、家に帰る途中、「ネーネ」と、アキオがつぶやくように言いました。「ネーネ、学校行っちゃったね」と私は言いましたが、アキオはまた静かにベビーカーに座っていました。

往復一時間ほどの道のりを帰りついたとき、アキオは「ネーネ！」と大きな声で呼び、返事のない玄関前で泣きました。家に入るのを嫌がり、「プー」と言っ

て車に乗り、保育園へ向かいました。ネーネのいない家に帰つてきて「ネーネ！」と泣いたアキオの姿を見て、ネーネの存在はアキオにとつて常に隣にあり、生活を共にする存在だったことに、私は改めて気づきました。

生活とは、かかわる場所や人がある程度決まっていることで安定してきます。細かなところは日々新しい子どもの生活ですが、同時に大まかな

ところでは日々変わらず連続している部分があります。その変わらない部分が、子どもに安定をもたらし、生活の足場になるのだと思います。

アキオは、これまでいつも一緒にいたネーネが自分とは別の生活を送るようになり、自分から離れていってしまうことを体験したのです。それは、アキオの生活の安定を揺るがす、大きな変化でした。大人はつい、小学校に入学する子どものことに気をとられがちです。しかし実は、生活を共にする小さな子どもにとって、きょうだいが小学校に入学することは、突然降って沸いたような大事件なのです。

### ・・ 家に帰ると

#### 石を用水路へ落とすこと

その次の日の朝から、アキオはネーネを見送る道すがら、「イシ」と言っ、石を私に拾わせる

ようになりました。道端に落ちているごつごつとした小石を、時には一つ、時にはたくさん、私に拾わせては、小さな手に握り締めて、ネーネを見送りました。そして、見送った後、「ネーネ、ガッコウ」「ネーネ、学校行くのね」、「イッチャッタ」「行っちゃったね」と私と話しながら帰ります。見送りにきた道を引き返すと、同じ制服を着た子どもたちが次々と通り過ぎていきます。アキオはその制服姿を見て、「ガッコウ」と言うようになりました。

それから、家に帰り着く直前に渡る用水路の所で、アキオは「イシ」ともう一度言います。そこでベビーカーを止めると、手に握り込んだ石を一つずつ、用水路に

ポトン……ポトン……

と落とし、手の届かない水の底に沈んだ石を静かに見て、「イ・ッ・チャ・ッタ」と言うのでした。

多くの子どもは石を拾い、側溝に落としてみま  
す。しかし、アキオの石にはアキオにとつての意  
味があることが、はつきりと感じられます。毎日  
ネーネを見送るときに握り込み、ネーネが見えな  
くなつてからポトンポトンと落とす。手の中に  
しつかりと存在するということと、その存在が手  
の届かない所に行つてしまふということ。それは  
まるで、いつも一緒にいるネーネが、ガッコウと  
いう手の届かない所に行つてしまふ、アキオから  
見た生活そのものを表しているように思えます。

ある朝、ネーネの登校前、アキオはぬいぐるみ  
をめぐつて、ネーネと珍しく激しいケンカをしま  
した。ぎゅつと握り込んでいる石を、その日だけ  
は指でつまんで持ち、カチカチとかち合わせてい  
ました。また、ネーネが道の途中、一緒に通う友  
達に出会つた日は、帰りのベビーカーで、石をさ  
らに拾わせて、友達の数と同じくらい握つて帰り

ました。

朝の見送りのときだけでなく、そのほかの所  
でも、石を拾つては用水路や側溝に落とすことを繰  
り返しました。ある一つの行動を繰り返すこと  
で、生活の連続した部分をつくりだし、安定を生  
み出していると見ることもできます。ただしそれ  
は、不変のものとしてかたくななものではなく、  
日々の細かな変化を受け入れるやわらかさをもち  
合わせていることが、アキオの石とのかかわりに  
見えるのでした。

### …石を握り込むこと

また、アキオはほかの何かでなく、石を選びま  
した。石は身近にいつもあるような存在で、容易  
には変化しません。水に溶けるわけでも、幼い子  
どもの力で簡単に壊れることもない、しつかりと  
して確かな存在です。石自体は、とても安定した

性質であると感じられます。そんなどこにでもある普通の石を、アキオは毎日毎日手にしつかりと握り込みました。自ら意識的に手放すとき以外は、ずっと握り込んでいました。転ぶときも石を握り込んだまま転ぶので、よく指の外側を擦りむき、ひどいときは、顔を地面で打って鼻血を出すこともありました。それほど、その時期のアキオにとつては、石が大事なものでした。生活の安定した部分が大きく揺るがされたとき、アキオは石という安定した存在を手の中に握り込み、そこに石が確かに存在するということによって、支えられていたのではないかと思えるのです。

### ・見通しがつく

そんな生活を一か月ほど続けたころのことです。朝、ネーネを見送るとき、アキオは石を一つ握って行きました。途中で出会った小学生のお兄

ちゃんが、アキオに小さな花をプレゼントしてくれました。すると、アキオは石を左手に、花を右手に持ち、ふっと柔らかな表情をしました。ネーネを含めて五人の小学生を見送った後、アキオは花をくるくると指で回しながら「ニイチャン、オハナ」と何度も言いました。そして、石を四つほど私に拾わせて握り、帰りました。ところが、帰り着いても用水路の所で止まらず、石を握ったまま通り過ぎました。そして、ベビーカーを降りるとき、

「ネーネ、オムカエ」

と初めて言ったのです。保育園の後に小学校の学童保育にお迎えに行くことを思ったのでしょうか。

そして、車に乗るとき、車の床にお花と一緒に石を置き、

「マツテテネー」

と言いました。アキオにとって、自分から離れ

て手の届かない所へ行ってしまうナーネ」が、  
「お迎えに行ったら会えるナーネ」に変化したよ  
うに感じました。

そして、その次の日から、アキオは朝、私に石  
を拾わせなくなったのです。アキオにとつての生  
活が、新しい安定をもつて、展開しました。

このようなアキオの石とのかかわりは、「アキ  
オは石にこだわっている」と言われるかもしれま  
せん。また、姉を見送るとき、ある種の儀式の  
ようにも見えます。子どもとの生活の中では、そ  
のようなこだわりと言われるようなものや、儀式  
的なものに多く出会います。一見同じことの繰り  
返しのように見えるその行動は、子どもにとつ  
て、心の安定をつくり出す大切なことなのです。  
そうせずにはいられない、子どもの心が必要とし  
ている行動なのだ、アキオは私に教えてくれた

ように思います。

「子どもの行動は、子どもが心に感じている世界  
の表現である」と津守眞氏は述べています。そう  
であるならば、何がその行動に表現されているの  
か解釈することが、その子どもの心のありように  
近づく一歩となるでしょう。行動を解釈すると  
は、そこにある固有の意味を感じ、知ろうとする  
ことともいえます。子どもによく見られる行動と  
するのではなく、その子どものその行動として見  
ることが求められます。そして、行動が心の表現  
であるからには、その心が形づくられてきた、  
その子どものそれまでの生活全体から、ある一つ  
の行動をとらえることが重要といえるでしょう。

(四国学院大学社会福祉学部 子ども福祉学科)

#### 引用文献

津守眞「保育の体験と思索」大日本図書 一九八〇年